

『忍ぶ恋』

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば
忍ぶることの 弱りもぞする

しよくしないしんのう
式子内親王

[現代訳]

私の命よ、絶えるならいっそ絶えてしまってくれ。このまま長く生きながらえて
いると耐え忍ぶ力が弱まって人に知られてしまうから。

作者の式子内親王は、後白河天皇の第3皇女で、10歳から約10年間加茂神社の齋院として務めていました。

一度神様にお仕えした女性はその後、男の人と恋をしてはいけない決まりになっていましたが、養和元年（1181年）正月にはじめて藤原定家が式子内親王を訪れて以降、折にふれ内親王の元へ通っているため、定家と内親王が秘かな恋愛関係にあったとする説が公然化しています。

能の演目にある「定家」では、内親王を愛した定家が死後も内親王のことが忘れられず、定家葛ていかかずらに生まれ変わり内親王の墓に絡みついたとされています。

定家が百人一首で詠んでいる「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身も焦がれつつ」の来ない人とは、後鳥羽院、順徳院、式子内親王のことだと言われています。

山陽小野田かるた協会 小田 広行